19 世紀後半のロシアの精神医学とその発想
――精神医学者ウラジーミル・チシ（1855-1922?）による文豪の生涯と作品の分析を手掛かりに――

久野　康彦

1.　19 世紀後半のロシアの精神医学とウラジーミル・チシ

主として芸術家・文学者・学者・政治家など傑出した人物を対象とし、個人の生涯を疾病、とりわけ精神病理学的な観点から研究分析し、その活動における疾病の意義を明らかにしようとする学問である「病跡学」（英 pathography、露 патография）は、精神医学の用語や発想が日常的なものとなった現代では、もはや新奇な印象を与えることはない。しかし、病跡学は、近代精神医学が急速に発展した 19 世紀に確立した、極めて歴史の浅いジャンルであり、臨床以外の精神医学の新たな適用領域として、また専門家以外の人々に精神医学の知識を平易に伝える啓蒙的な研究として、そして新しい観点による文学研究として当時の人々に極めて斬新な印象を与えるものであった。史上初めての病跡学的著作としては、フランスの医師ルイ＝フランソワ・ルリュの『ソクラテスのダイモン』（1836）が挙げられるが、真にこのジャンルを確立したのは、「病跡学」という用語を新たに造り出したドイツの精神医学者パウル・メビウス（1853-1907）と独特な犯罪人類学で世紀末の思想に強い影響を与えたイタリアのチェザーレ・ロンブローゾ（1835-1909）であり、とりわけ後者の『天才と狂気』（1863）である。

このようなメビウスやロンブローゾに代表される西欧の病跡学の影響を受け、ロシアでも 19 世紀末から 20 世紀にかけてさかんに病跡学的著作が書かれるようになる。ロシアで最初の病跡学的著作とされるのは、ハリコフ大学教授のパーヴェル・コヴァレフスキー（1849-1923）の『イヴァン雷帝と彼の精神状態』（Иоанн Грозный и его душевное состояние, 1893）であり、以後、イヴァン・シコルスキー（1845-1918）、ニコライ・バジェーノフ（1857-1923）、グリゴーリイ・トローシン（1874-1938）、ニコライ・オシーポフ（1877-1934）、チモフェイ・セガロフ（1881-1928）など、当時の著名な精神医学者たちの多くが病跡学に手を染めてゆく。そして、イヴァン雷帝、ピョートル大帝、ピョートル３世、パーヴェル１世、ナポレオン１世といったロシアや外国の歴史的人物と並び、ロシアの精神医学者が特に強い関心を寄せたのは作家たちの生涯と作品であった。プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、レフ・トルストイといった大作家からガルシン、アンドレー

エフ、ゴーリキーなど同時代の作家まで彼らの考察は及んでいる。[1]

このような19世紀末以降のロシアの病跡学の興隆には、ロシアにおける精神医学の急速な発展が背景となっている。精神病患者収容施設の建設はエカテリーナ２世時代にさかのぼることができるが、精神医学が真に学問として確立したのは19世紀後半であった。一方では、エカテリーナ２世時代の前近代的な社会保護施設（Приказы общественного призрения）の改革の論議が1869年のカザン管区アサイラムの建設となって実を結び、さらに以後ゼムストヴォに精神病患者のケアの責務が委ねられることになる。他方では、アカデミズムの場に精神医学が独立した学問として浸透し、講座・付属病院などが次々と開設されてゆく。例えば、1857年にペテルブルクに精神医学の講座が開設されたのを皮切りに、ハリコフ（1878）、カザン（1885）、モスクワ（1893）と、主要な都市の大学に次々と精神医学の講座が開設され、それぞれ優秀な精神医学者たちを輩出すると同時に若き精神医学者たちが就職し活躍する場ともなった。またペテルブルクの外科医学大学は、イヴァン・バリンスキー（1838-1908）やイヴァン・メルジェエフスキー（1838-1908）の指導の下、ヴラジーミル・ベーフテレフ（1857-1927）など優秀な若手の精神医学者を育成し、ロシアにおける精神医学研究の一大拠点となってゆく。さらに1883年にはロシア初の精神医学雑誌が２誌刊行され、1887年には精神医学者たちによるロシア初の全国的学会、1911年にはロシア精神医学者・神経学者学会が設立されてゆく。[2]

当論考の考察の対象であるウラジーミル・フョードロヴィチ・チシ（Владимир Федорович Чиж, 1855-1922?）も、このような当時急速な発展を遂げつつあったロシアの精神医学を代表する医師の一人であった。1855年6月9日、スモレンスク県の貴族の家庭に生まれたチシは、ポロツク陸軍幼年学校で中等教育を受けたのち、1878年、ペテルブルク外科医学大学を優等で卒業する。当時精神医学を志す若きエリートたちは、国内で学んだのち西欧の各地の大学・診療所を渡り歩いて研鑽を積むというのが定番の出世コースであり、チシも将来を嘱望されたエリートとしてその道を歩む。まずクロンシュタット病院の精神科、次いで1880年からペテルブルクの軍医学大学付属精神病院に勤務し、1883年博士論文の審査に合格したのち、1884年彼は晴れて国外留学へと赴くのである。ライプツィヒの心理学者ヴントや神経学者フレヒジッヒ、リエジュのデリベフやナンシーのベルネーム、パリの生理学者ヴュルピアンやシャルコーなど、全ヨーロッパ的な名声を誇る優秀な精神医学者た

---

[1] ロシアにおける病跡学の歴史については、См. *Сироткина И.Е.* Литература и психология из истории гуманитарного подхода // Вопросы психологии. 1998. № 6. С.75-85; Irina Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius. A Cultural History of Psychiatry in Russia, 1880-1930* (Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 2002).

[2] ロシアにおける精神医学の歴史については、*Розенбах П.* Психиатрические заведения // *Андреевский И.Е.* (ред.) Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. СПб., 1898. Т. 25. С. 675-677; *Сироткина И.Е.* Психология в клинике: работы отечественных психиатров конца прошлого века // Вопросы психологии. 1995. № 6. С. 79-92; Julie V. Brown, 'Social Influence on Psychiatric Theory and Practice in Late Imperial Russia', in Susan Gross Solomon and John F. Hutchinson, eds., *Health and Society in Revolutionary Russia* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990) , pp. 27-31; Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius*, pp. 11-12 を参照した。

ちの研究所や診療所を彼は渡り歩くことになる。1885 年にロシアに帰国したのちは、ペテルブルク最大の聖パンテレイモン病院の主任医師を務め、さらにロシア初の実験心理学の研究室を同病院に開設するなど第一線の医師・学者として活躍。1888 年からはペテルブルク大学法学部の専任講師として法精神病理学に関する講義を開始。さらに後に精神医学の泰斗となる若き日のエミール・クレペリンが数年前勤務していたユーリエフ（旧デルプト、現タルトゥー）大学に 1991 年に転任。それまで優勢であったドイツ系の教授に代わる初のロシア人教授として 1880 年に開設された精神医学講座を担当し、電気療法、生理学的心理学、法精神病理学などに関して講義し、さらに精神病・神経病を治療する付属病院も指導、また幅広いテーマで一般向けの講演も行ったと伝えられている。[3]

このようにチシは精神医学者として極めて順当なコースを歩み、ロシア帰国後は名実ともに当時のロシアを代表する精神医学者の一人と見なされていた人物であった。しかし、専門家としての研究や実践以上に彼の名を同時代人たちに強く印象づけたのは彼の一連の病跡学的著作であった。1885 年の『精神病理学者としてのドストエフスキー（Достоевский как психопатолог）』を始めとして、プーシキン、ゴーゴリ、ツルゲーネフといった文豪たちの生涯や作品を精神医学の観点から分析した著作・論文を次々と発表し、当時の読書界の話題をさらうことになる。ブリューソフが実質的な編集長であった雑誌『天秤座（Весы）』にチシのゴーゴリ論の評が 1904 年に掲載され、またベールイの『シンフォニー』の『回帰』（1905）にチシに関する言及が見られる点などから判断すると、チシの知名度は精神医学者の間だけではなく、当時の文化人一般にまで広がっていたと考えてもよいだろう。[4]

精神医学者としてのチシは、何よりもまずロシアにおけるウィルヘルム・ヴントの実験心理学の信奉者・紹介者の一人として知られる。彼は赴任先の大学・病院に実験心理学の研究室を作り、ロシアにおけるヴントの方法論の実践と普及に努めた。他方、彼はイタリアの法医学者ロンブローゾの学説の信奉者でもあった。ロンブローゾの学説は世紀末のヨーロッパの思想に強力な影響を及ぼしたが、ロシアの精神医学者たちは必ずしもロンブローゾの理論を強く支持したわけではなかった。[5] この点、当時のロシアの精神医学者とし

---

[3] 以上、チシの生涯については *Андреевский* (ред.) Энциклопедический словарь Брокгауза и Ефрона. 1903. Т. 38. С. 822; *Осипов В*. Чиж, Владимир Федорович // *Железнов В.Я. и др*. (ред.) Энциклопедический словарь Гранат. М., 1930. Т. 48. С. 576-577; *Унанянц Н.Т.* Судьба профессора Чижа // *Чиж В.Ф.* Психология злодея, властелина, фанатика. М., 2001. С. 3-10; Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius*, pp. 23-35 を参照した。第 1 次世界大戦以降のチシの生涯は、没年も含め現在不明な点が多い。См.: *Унаняц*. Судьба профессора Чижа. С. 8-10.

[4] Весы. 1904. № 4. С. 74; *Белый А*. Симфония. Л., 1991. С. 215.　以上 *Унанянц*. Судьба профессора Чижа. С. 7-8 の情報に拠る。

[5] См.: Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius*, pp. 24-25; Laura Engelstein, *The Keys to Happiness: Sex and the Search for Modernity in Fin-de-Siècle Russia* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1992), pp. 130-164. エンゲルステインは、1889 年パリで出版された娼婦と女性犯罪者に関する研究がロンブローゾに大幅に利用されたことで知られるロシアの女性医師プラスコヴィヤ・タルノフスカヤを特に詳しく論じ、彼女がロンブローゾの理論を「柔軟に」解釈し、結果として犯罪における社会的要因の重視が見られることを指摘している。

てはチシはやや例外的な存在に属する。またロシアの精神医学者の多くは急進的な傾向を持っていたのに対し、チシは、著作の中でテロリストを「退化者」と断罪しているように、極めて保守的な政治的見解を持っていた点も、当時のロシアの精神医学者としてはやや異質であった。[6] このような特徴は、今日、後の世代の精神医学者たちの病跡学と比べると少々古めかしいものと見えなくもない。しかし、チシはロシアで病跡学に手を染めた第 1 世代に属する精神医学者であり、この世代の病跡学こそが初めてロシアの文化人たちに病跡学というジャンルを紹介したのである。

以下、プーシキン、ツルゲーネフ、ドストエフスキーに関するチシの考察を具体的に検討し、そこにどのような精神医学的な発想が現れているかを見てゆきたい。

2. プーシキン——完全に健康的な天才

プーシキンを論じた『精神の健康の理想としての A.C.プーシキン』は 1899 年に発表されている。[7] 歴史的な文脈という点では、この 1899 年という発表年は大きな意味を持っている。1880 年代から 90 年代にかけての時期は「国民詩人」としてのプーシキン神話が確立して行く時期でもあった。そのきっかけは 1880 年のモスクワにおけるプーシキンの記念碑の除幕式（ドストエフスキーの記念演説が有名である）であり、続く 1887 年の没後 50 周年を経て、1899 年の生誕 100 周年で頂点に達する。この年には、プーシキンをめぐる無数の演説、祝辞、記念記事が書かれ発表されただけではなく、巻きたばこ、マッチ、インク壺にまでプーシキンの肖像画と名前があしらわれて売りに出されるほどであった。[8] チシのプーシキン論が発表されたのはまさしくこの 1899 年であり、それはプーシキンの偉大さを医学的観点から証明するものとして読むことができる。以後、プーシキンに関する病跡学的研究として、П.Я ロゼンバッハの『狂気と精神的健康との間にある境界的状態について』(1899)、И.A.シコルスキーの『A.C.プーシキン』（1899)、『プーシキンの人類学的・心理学的系譜学』（1912)、M.O.シャイケヴィチの『精神病理学と文学』（1910）などがチシに続くことになる。[9]

1899 年という記念年に発表され、その後に続くプーシキンの病跡学的研究の嚆矢となったチシのプーシキン論は、「天才」と「病気」をテーマに書かれている。「天才」と「狂気」

---

[6] См.: Engelstein, *The Keys to Happiness*, pp. 261-264; Julie V. Brown, ‘Professinalization and Radicalization: Russian Psychiatrists Respond to 1905’, in Harley D. Balzer, ed., *Russian Missing Middle Class: The Professions in Russian History* (Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 1996), pp. 143-167.

[7] 初出は A.C. Пушкин как идеал душевного здоровья // Ученые записки Юрьевского университета. 1899.

[8] См.: *Муравьева О*. Образ поэта. Исторические метаморфозы // Дома у Пушкина. СПб., 1994. С. 11-19.

[9] 19 世紀末から 20 世紀にかけてのプーシキンをめぐる病跡学著作については、См.: *Сироткина И.Е*. A.C. Пушкин: страницы из истории российских издании по психологии и психиатрии // Вопросы психологии. 1999. № 3. С. 89-98.

を結びつけたのはロマン主義者たちであったが、ロンブローゾはさらに「天才」と「病気」を結びつけ、すべての天才は精神病患者であるという結論を下した。それでは「天才」であることは疑いもないプーシキンもまた狂人であり、精神病患者なのだろうか？　このような問題設定からチシのプーシキン論は始まる。

「プーシキンはあまりに偉大な存在で、彼の作品はあまりに内容豊かであるので、彼の生涯と作品を研究することは、芸術家やモラリストや政治家や歴史家だけではなく、医者にとっても教訓となることである。医者は、精神の健康の理想はどんな点にあるか、天才は狂気に対しどんな関係があるかという極めて重要な問題に対する解答をプーシキンの作品の中に見つけることができるのである。」[10]

原則的にはロンブローゾの理論の支持者であるチシは「健康的な天才（здоровый гений）」と「病的な天才（больной гений）」という対立概念を設定し、前者をプーシキンにあてはめることによって、結果的にロンブローゾの理論における「例外」を認める。「プーシキンが理想的な精神の健康を持っていたという疑いもない事実は、確かに天才の中には病人もいるものの、天才と狂気が近くて似ているとする理論を完全にくつがえしてくれるのである。」[11]

それでは「健康的な天才」や「病的な天才」とは具体的にどのような人物を指し、どのような特徴を持つものと考えられているのだろうか？　チシが「病的な天才」として名前を挙げているのは、ミュッセ、ポー、ボードレール、ヴェルレーヌ、ゴーゴリ、ピーセムスキー、フロベール、ドストエフスキーたちである。彼らはみな優れた才能や創造力を持っていたとはいえ、その多くは遺伝的な疾病を有し、その遺伝的な疾病はさらに関心の偏りや社会性・道徳性の欠如として精神の領域にも現れたとチシは考える。それに対しプーシキンはそのような「病的な天才」に属さない例外である。こうしてチシはプーシキンの例外性を裏付ける様々な「証拠」を挙げてゆく。

ロンブローゾが精神異常における遺伝的要因を重視するのと同様に、彼もまず注目するのはプーシキンの遺伝的素質である。チシによれば、プーシキンの両親、兄、妹は完全に健康であり、プーシキンの家系にも精神病患者は見あたらない。母方の祖父のみ疑わしいところがないわけでもないが、決定的な情報はなく、また祖父の精神の病が孫の健康に影響を持つのもまれであるとしている（この点はロンブローゾの隔世遺伝説と異なる見解である）。さらにチシはプーシキンの生涯を検討し、ベンケンドルフの無礼な専横、金銭の不如意に関する絶え間のない心配、上流社会の敵意ある態度、妻への嫉妬といった家庭内の問題などの数々の生活の不幸によってでさえ、彼の健康は損なわれず神経症にさえならな

---

[10] *Чиж В.Ф.* А.С. Пушкин как идеал душевного здоровья // *Чиж В.Ф.* Болезнь Н.В. Гоголя. М., 2001. С. 419.

[11] *Чиж*. А.С. Пушкин как идеал... С. 437.

かったという事実によって、彼が「完全に健康な神経系を有していた」という結論を導き出す。

遺伝的な健全さに加え「健康的な天才」の必要条件としてさらにチシが挙げるのは、調和のとれた道徳性、すなわち、「真善美に向かう気高い欲求」である。この「真（истина）」「善（добро）」「美（красота）」の３つがバランスよく存在していなければ真の「健康的な天才」とはなりえない。例えば、チシによれば、デカダン派の芸術家は「美」にしか関心を持たないため、「健康的な天才」とはほど遠い存在である。「健康的な天才」はあらゆる領域に偏りのない関心を向ける者であり、それゆえ知識・関心の多面性が「健康的な天才」の必然的な属性となる。「人間がより健康になるにつれ、すなわち、その脳がより正しく発達するにつれ、その人間の知識もより多面的になってゆくのである」。[12] しかし、チシがプーシキンの知識の多面性の証拠として挙げる項目は、今日の我々の眼からするとかなり牽強付会と言えるものが多い。例えば、プーシキンが生理学の領域にも造詣が深かったという事実の証拠としてチシが挙げるのは、『ポルタヴァ』における次のような記述である。

「生理学のような専門的な知的領域でさえ、プーシキンは極めて正確な見解を持っていた。プーシキンは、『ポルタヴァ』の中でコチュベイの精神的な苦しみを描いてから『刑吏が入ってきた（палач вошел）』という言葉の後に多重点（...）を置き、それからただ『おお、苦しみの夜よ！（O, ночь мучений!）』とだけ書き加えている。この多重点は、プーシキンが肉体的な苦しみの描写は不可能ということを理解していたことを我々に証明している。ゴリトシャイダーが全く正確に述べているように、『痛みは精神を抑え、思考を停止させ、意志を麻痺させる』のだ。精神的な苦しみはどんなにひどいものでも描くことができる。しかし、肉体的な苦しみはプーシキンでさえ描くことができず、彼にはそれがわかっていたのだ。」[13]

チシは、同じような強引な論法で、『ルサルカ』における公爵のセリフ「誰もが彼に対して好き勝手にしている、神は彼を裁きはしないだろう（Над ним всяк волен, Бог его не судит.）」を、プーシキンが精神病患者に責任能力がないことを正確に知っていたことの証拠として挙げ、さらにはロシアの作家のテクスト内の母音と子音の数を集計したある学者の研究を引き合いに出し、ドストエフスキーやトルストイでは母音と子音の間の比率が作品によってかなり揺れがあるのに対し、プーシキンの詩作品においては極めて安定している（「毎回 38.95-39.10 という数字、すなわち、39%という端数のない数に極めて近い数字が得られるのである」）という事実が彼の健康さを裏付けているとしている。

このようなチシの論証方法からわかるのは、客観的な科学的言説を装ったチシの言説が、実際にはそれほど厳密な科学的基盤を持っていないということである。むしろチシのプーシキン論から見て取れるのは、度重なる記念年の行事などを通じて確立した「国民詩人」としてのプーシキンのイメージを「病的な天才」のカテゴリーに入れることによって破壊

---

[12] *Чиж*. А.С. Пушкин как идеал... С. 423.
[13] *Чиж*. А.С. Пушкин как идеал... С. 424.

したくないという極めて素朴な愛国者の姿である。チシが表には出そうとはしない、しかし現代の読者には明白なこの愛国的感情ゆえ、チシのプーシキン論は、彼の他の論考にも増して独断的で滑稽なまでのこじつけに満ちている。だが、プーシキン論ほど強引な論法はないとはいえ、研究者個人の道徳的観点が客観的で科学的な言説を装って語られているのは、チシの他の病跡学的著作にも共通する特徴となっている。

3. ツルゲーネフ――病理的な心理現象を正確に描いた偉大なリアリスト

1899 年に発表された『精神病理学者としてのツルゲーネフ』[14] は、同時代的には必ずしも評価の高くなかったツルゲーネフの晩年のいわゆる「神秘小説（таинственные повести）」を精神医学の観点から再検討したものであり、そこでは芸術家の鋭い直感と観察力による病理学的現象の正確な描写が高く評価されている。ツルゲーネフの「神秘小説」を本格的に論じたものとしては、インノケンティイ・アンネンスキーの『瀕死のツルゲーネフ』（Умирающий Тургенев, 1906）と並び、もっとも早い例である点がまず注目に値する。

チシは、近年における精神病理学的な精神現象に対する学問的研究の発展、および社会生活、学問、芸術におけるその種の現象の巨大な役割を指摘し、18 世紀ではゲーテのような偉大な芸術家でさえ精神の病を無視していたが、現代の小説家たちはもはや病理学的な精神現象を無視できないと語る。こうして、ツルゲーネフも、現代の芸術家として、正常な精神現象だけではなく、病理学的な精神現象にも注意を向けることになる。そして病理学的な精神現象でさえ正確に描いたツルゲーネフの能力に、チシは芸術家としての偉大さを見てゆくのである。しかし、その際彼は２点留保を加える。１つはツルゲーネフがドストエフスキーほど病理学的現象を詳しく描かなかった点である。チシは、病理学的な精神現象を扱ったツルゲーネフの作品を『クララ・ミリッチ』『勝ち誇れる愛の歌』『無鉄砲な男』『神父アレクセイの物語』『不思議な話』といった短編に限定している。もう１つは解釈者の重要性である。ツルゲーネフは病理学的な精神現象をただ芸術家の直感と観察力によって提示しただけであり、その真の意義は必ずしも誰にでも明らかなわけではない。それゆえその真の意義を明らかにする適切な読み手がいなければ芸術家の偉大さも証明されえない。こうして解釈者として創作者にも比すべき特権的な使命と地位が与えられるのは精神医学者である。「ツルゲーネフの作品における病理学的な精神現象の描写や記述の研究は、ロシアの精神医学者の義務をなす。ただ精神医学者のみが我々の偉大な作家がどれほど正確に精神病患者を描いたかということを明らかにし、先に挙げた短編を説明することができるのである」。[15] 以下彼の論法を具体的に見てゆこう。

財産を蕩尽した貴族が大きな街道で施しを集めるほど零落し、その施しでさえ酒に使っ

---

[14] 初出は И.С. Тургенев как психопатолог // Вопросы философии и психологии. 1899. 単行本として出版されたのはモスクワ、1899 年。

[15] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог // *Чиж*. Болезнь Н.В. Гоголя. С. 206.

てしまうほど落ちぶれるという筋の短編『無鉄砲な男』（1882）は、チシによれば、批評家や読者の注意を引かず、ツルゲーネフの最良の作品でもないが、「退化」を正確に描いた作品であり、その点にこそこの作品の価値があるという。主人公ミーシャの退化の特徴として彼が挙げてゆくのは、まず父が癲癇患者で母が神経質で病的な人物であったという遺伝的要因、そして「《大きくて白く、獣のように鋭い》歯、いくぶん落ち込んだ湿った目、鋭い、野蛮なとさえ言える、ほとんど獣のような笑い[…]、バラ色の新鮮な顔、驚くべき持久力」[16] といった獣を思わせる特徴である。またミーシャが片手を銃で撃ってもすぐに回復し、死の直前までほとんど子供のような顔の新鮮さを保ち、あらゆる不摂生にもかかわず病気知らずであった点に「持久性（выносливость）」という特徴を見いだし、ロンブローゾが注目した犯罪者の属性である「傷つきにくさ（неранимость）」（退化した犯罪者たちは重傷にも容易に耐えることができる）と結びつける。ツルゲーネフは、ロンブローゾの指摘に先立ち、すでに『荒野のリア王』（1870）のハルロフにおいて退化者のこの特性を描いており、「偉大な芸術家が純粋に専門的問題でさえ学者たちに有益な教示を行うことのできる」ことを強調する。さらに度を超した飲酒の習慣、労働意欲・能力の欠如、社会生活に対する不適応が指摘され、女性からの奇妙な好意と女性に対する無関心に注意が向けられる。「酔っぱらった浮浪者が女性の好意を得ることは信じがたいように思えたことを私は覚えている。しかし、その後の精神医学の活動において、私はたびたびツルゲーネフの観察の正しさを確信した。[…]精神病院のある官吏の妻が、その病院の精神痴呆患者に非常に関心を持ったので、患者を別の施設に移さなければならなかったことを覚えている。」[17] そして最後に挙げられているのは、退化者における無鉄砲さと臆病さの結合である。「エルゼルト・ネヴィンと私は、臆病者のこの無鉄砲さを想像力の欠如で説明しようと試みた。ある種の退化者たちは、未来のことを考えることができず、自分の行為の不可避的な結果を思い浮かべることさえできない。野蛮人のように、彼らは全く現在の動機で生きているのである。」[18] チシは、ツルゲーネフによって描かれているこのような「無鉄砲な人」を、テロにいそしむ現代のアナーキストたちに重ね合わせ、彼らはみな退化者だが、社会が平和な状態ならば無害な存在であると結論づける。

『無鉄砲な男』に次いでチシが取り上げるのは、ツルゲーネフの最後の作品で、青年と女優との奇妙な恋愛を描いた中編『クララ・ミリッチ』（1883）である。彼はまず『無鉄砲な男』と同じ「退化」のモチーフをこの作品に見いだす。すなわち、主人公アラートフは、『無鉄砲な男』のミーシャ・ポルテフと同じく、高等退化者で精神病患者である。「高等退化者（высший вырождающийся）」とは、チシによれば、フランスの精神医学者たちが導入した用語で、「満足すべき知的能力、あるいは優れたとさえ言える知的能力に恵まれた退化者」

[16] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 209.
[17] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 218.
[18] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 221.

[19] と定義される。高等退化者は互いに似ておらず、多様であり、類型化は難しい。チシは、『無鉄砲な男』のミーシャとアラートフを比較して両者の共通点と相違点を指摘し、遺伝と環境、学業放棄、労働忌避、女性に対する無関心、神秘への志向の中にアラートフの退化の兆候を見いだしてゆく。さらに彼は、クララ・ミリッチにも退化者というレッテルを貼り、非ヨーロッパ的なエキゾチックな外見、遺伝と育ち、異常な性生活、すなわち、男性を避けるが男性によって自分の幻想を刺激する点、女らしさ（женственность）の欠如などに退化の兆候を見いだしてゆく。「ザッヘル＝マゾッホならクララから自分の小説のヒロインを作り、びんたを受け女性の《僕（しもべ）》になることが大きな快楽をもたらす主人公をも見つけるだろう。」[20] そして精神病患者は精神病患者を愛するというシェークスピアやシャルコーの指摘を根拠に男らしいミリッチが女らしい美しいアラートフを愛するという倒錯的な構図をこの作品に見いだしてゆく。

一方、退化と並んで『クララ・ミリッチ』にチシが見いだす重要な精神病理学的現象が「感覚の錯誤（обман чувств）」である。アラートフにおける強迫観念（навязчивые идеи）の描写は、有名なクレペリンの教科書における説明よりも明快で正確と語った後、この作品における感覚の錯誤の描写のリアルさにチシは感嘆を表明する。すなわち、それは、病人における「妄覚（галлюцинация）」と「幻覚（иллюзия）」との混同（「妄覚」を「感覚的刺激に由来しない主観的な感覚的受容」、「幻覚」を「通常の方法で行われた感覚の刺激のプロセスが感覚器官に行く途中で変化を被り、意識に対して現実に一致しない、ゆがめられた、あるいは過った形で現れるもの」と区別したクラフト＝エヴィングが引用されている）、病気の初期の夢の描写や身体的兆候、聴覚的妄覚と視覚的妄覚、感覚の錯誤の影響で現れる譫妄観念（идея бреда）の描写などである。

老司祭が自分の息子ヤコヴの異常な生涯を著者に語るという設定の『神父アレクセイの話』（1877）は、チシによれば、ただ病気の話であって、それ以上の何ものでもない。ツルゲーネフはこの話に描かれた病人を実際に見たとチシは推測するが、それは実際の観察なしにこの物語における描写の正確さが説明できないからである。他のケースと同様、ここでもチシが注意を向けるのは対象となる人物の遺伝的要因と幼年時代であり、異常な早熟さ、年にふさわしくない行動、学業放棄、肉体や性格の変化などが指摘される。「今や経験豊かな精神医学者ならヤコヴの状態がわかるだろう。[…]彼が病気なのは明らかである。人と打ち解けぬ性質や自分が健康であるという確信や彼の姿勢は、彼には、アラートフ同様、感覚の錯誤と譫妄観念があることを示している。」[21] こうしてチシは精神の病という観点から主人公の行動を分析し、死に至るプロセスを説明してゆく。短編は 1877 年に書かれたが、作者は 20 年前、病気の話を年老いた神父アレクセイから聞いたと語っているので、事件は 50-70 年ほど前の話とチシは推定する。当時の精神医学は、精神の不調は罪深さから生じる

[19] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 224.
[20] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 231.
[21] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 247.

といったハインロート（1773-1844）やイーデラー（1785-1869）などの説が有力であり、ここで再び同時代の学問的成果に先行したツルゲーネフの芸術家としての観察力が強調される。

『勝ち誇れる愛の歌』（1881）と『不思議な話』（1870）にチシが見る精神病理現象は「催眠」と「暗示」である。『勝ち誇れる愛の歌』は『クララ・ミリッチ』以上にファンタスティックな作品であり、ありえない出来事を描いたという印象を受けるが、「催眠」と「暗示」に関する正確な知識を念頭に置くと、実はこの上なくリアリスティックな作品であるというのがチシの評価である。「現在、我々が催眠と暗示について二三知った後は、我々は、この短編でツルゲーネフが、人生をあるがままに描いた誠実なリアリストであり続けたことを認めなければならない。」[22] 催眠と暗示という現象については、ツルゲーネフはすでに『その前夜』（1860）や『父と子』（1862）で描いているとチシは述べる。すなわち、美しく裕福な未亡人がどうして粗野で貧しいが頭の良い医者に恋をするのかという疑問は催眠と暗示という現象によってしか説明し得ない、というのである。

『勝ち誇れる愛の歌』においては、ムーツイがヴァレリヤにかけた催眠と暗示が主たる検討対象となる。「暗示（внушение）」を「よその人間の影響によって吹き込まれた観念が意識によって取り込まれ現実化すること」、「催眠（гипноз）」を「短時間の病理学的な状態であり、人工的に引き起こされた睡眠に似た意識の変化を指す」と定義して区別したのち、チシは、ムーツイがヴァレリヤにかけた催眠における薬物と音楽の重要性をまず指摘する。次いで催眠を「神経症によって引き起こされた身体の病理学的な状態」と見るシャルコーと「自然の夢と一致するとまでは言えないまでも非常に近い生理学的状態」と見るベルネームの２つの対立する説を紹介し、[23] 両者の実演を見たというチシはシャルコーを支持する。そしてヴァレリヤの人工的な催眠をシャルコーの説明を援用して説明してゆくのである。さらに『勝ち誇れる愛の歌』から巧みな催眠術師は自分の犠牲者にいかなる犯罪をさせることもできるという結論を導き出すなら、それは必ずしも正しくないとも語る。というのも、健康な人間にはその意志に反して催眠術をかけることはできないが、病気の人間に対してはできるからである。そしてチシは、ヴァレリヤは５年の結婚生活にもかかわらず子供がいなかったというディテールに注目し、ヴァレリヤには性生活の不満があったのでは？という推測も行っている。

『不思議な話』では病理学的な要素は副次的なものだが 1869 年に書かれたという点にチシは注目する。彼によれば、催眠の学問的研究は 1873 年プライエルによって始められた。しかし、プライエルの研究は注目されず、80 年代の始めにシャルコーの研究とベルネームの著書によって催眠と暗示の現象がやっと全世界に知られるようになる。すなわち、専門

---

[22] *Чиж*. И.С. Тургенев как психопатолог. С. 255.

[23] これはサルペトリエール学派とナンシー学派の催眠をめぐる対立として精神医学史上有名な論争である（レイモン・ド・ソシュール、レオン・シェルトーク『精神分析学の誕生――メスメルからフロイトへ――』長井真理訳、岩波書店、1987 年、63-88 頁 ; アンリ・エレンベルガー『無意識の発見 : 力動精神医学発達史（上）』木村敏・中井久夫監訳、弘文堂、1980 年、99-117 頁）。

家でさえ催眠術に対しては間違った知識しか持っていなかった時期に、催眠や暗示についてツルゲーネフが正確に描いたことにチシは再三読者の注意を促す。

こうしてツルゲーネフの個々の作品における病理学的現象の正確な描写を逐一指摘した後、チシは次のように総括する。病理学的な心理現象はツルゲーネフの作品の中では大きな役割を占めておらず、彼がそれに眼を向けたのは、晩年になってからようやくである。しかし、病理学的な心理現象に関する「比較的」少ない記述はその正確さで我々を驚かせる。ツルゲーネフの伝記的情報はまだ不足しているものの、作家は精神医学に関心を持っておらず、精神医学に関する文献もさほど読んでおらず、彼の親しい知人の中にはロシアにもドイツにもフランスにも精神医学者はいないため、精神医学者たちとの会話や精神病患者の施設の訪問から情報を得たこともないのは間違いない。そう考えると、理論的な情報の不足が逆に正確な観察をもたらしたのであり、疑わしい文献に頼らなかった点でツルゲーネフはゾラよりも上である。ツルゲーネフがあまり関心を持たなかった病理学的な心理現象さえ正確に描いたことは、彼の全作品における記述の正確さの証拠ともなり、それはツルゲーネフの偉大さの証拠ともなる。

だが、ツルゲーネフの死後それほど時間が経っておらず、まだ作家の詳細な伝記的事実が明らかになっていなかったという事情があるにせよ、ツルゲーネフの精神医学の知識をめぐるこのようなチシの推定は事実に反している。精神医学研究に関して当時最先端の地であったパリに晩年在住していたツルゲーネフが精神医学に関してほとんど関心も知識もなかったというのは考えがたい。晩年のツルゲーネフはサルペトリエール病院の院長シャルコーの診察を受けていたが、[24] まさにそのシャルコーは、ヒステリー患者の治療を実演した講義で全ヨーロッパ的な注目を浴び、専門家のみならず一般の人々にも広く知られた存在だったのである。またツルゲーネフの「神秘小説」に当時の実証的自然科学、とりわけ催眠、意志の服従など精神に関する科学の影響を指摘する研究も多い。[25] チシの総括は精神医学に関するツルゲーネフの無知を意図的に強調した上でなされているものであり、そこには作家がいかに正確な観察を提示しても、その正確さを指摘し保証できるのは精神医学者のみであるということを読者に強く印象づけたいチシの戦略が隠れていると言えるだろう。

---

[24] См.: 1882 年 4 月 6（18）日付け М.Г.サヴィナ宛書簡、4 月 8（20）日付け Ж.А.ポロンスカヤ宛書簡、4 月 11（23）日付け П.В.アンネンコフ宛書簡など（*Тургенев И.С.* Полное собрание сочинений и писем. Письма. Т. 13. Л., 1968. С. 232-233, 235）。

[25] См.: *Бялый Г.* Тургенев и русский реализм. М.-Л., 1962. С. 198-221; *Зельдхейн-Деак Ж.* «Таинственные повести» Тургенева и русская литература XIX века // Studia Slavica. T. 19. 1973. C. 347-364; *Он же*. «Сон» Тургенева. К проблеме поэтики «таинственных повестей» // Studia Slavica. T. 28. 1982. C. 285-298; *Муратов А.Б.* Повесть И.С. Тургенева «Песнь торжествующей любви» // Studia Slavica. T. 21 F. 1-2. 1975. C. 123-137; *Он же*. Рассказ Тургенева «Странная история» // Studia Slavica. T. 24. F. 3-4. 1978. C. 349-368; *Осьмакова Л.Н.* О поэтике «таинственных» повестей Тургенева // *Шаталов С.Е.* (ред.) И.С. Тургенев в современном мире. М., 1987. С. 220-231.

4. ドストエフスキー――偉大な犯罪学者

『精神病理学者としてのドストエフスキー』（1885）に続くチシの２番目のドストエフキー論である『犯罪学者としてのドストエフスキー』（1901）[26] は、犯罪学の観点からドストエフスキーの作品を論じた研究である。そこではロンブローゾによる犯罪者の分類がほぼ忠実にドストエフスキーの作品の主人公に適用されているのが特色である。

チシによれば、ドストエフスキーほど事実そのままに完璧に犯罪者を描いた芸術家はおらず、彼は犯罪学の確立より数十年先んじて犯罪学が提示した犯罪者の諸類型を正確に描いた唯一の作家である。長いこと評価されることのなかったドストエフスキーのこの功績を初めて正当に評価したのがロンブローゾとその一派であるが、ロシアでは、A.Ф.コーニの 1881 年 2 月 2 日の法律協会の講演『刑法学者としてのドストエフスキー』におけるわずかな言及を除けば、犯罪学者としてのドストエフスキーという問題意識はほとんど見られない。その「空隙」を埋めるべく発表されたのが『犯罪学者としてのドストエフスキー』という論文であるとチシは語る。こうして彼は、生来性犯罪者、機会性犯罪者、激情犯罪者、精神病型犯罪者などロンブローゾによって提唱された犯罪者の分類を次々とドストエフスキーの作品の主人公にあてはめてゆく。[27]

『死の家の記録』（1861-62）でドストエフキーが描いたのは、チシによれば、「まっとうな人間（честные люди）」と著しく異なるとされる「犯罪者型人間（преступный человек）」であった。これはロンブローゾにおける根本概念であり、犯罪における環境・社会的な要因よりも生物学的要因を重視する考え方である。すなわち、「犯罪者型人間」は環境や状況や貧困や無学ゆえに犯罪を行うのではなく、生物学的に犯罪を行う素質があるから犯罪を行う、とされるのである。こうして『死の家』において政治的犯罪や宗教的犯罪によって流刑された人々、例えば、信仰を守った頑固さゆえに流刑された旧教徒の老人や政治犯レズギン・ヌラが「まともな人間」として挙げられるのに対し、凶悪な強盗オルロフや貴族だが卑劣な密告者の А-в が「生来性犯罪者」に分類される。後悔や良心の呵責の欠如、密告・罵倒、労働忌避、飲酒、性的快楽、賭事への抑えがたい欲望、友情を結ぶ能力の欠如、苦しむ者や隣人に対する同情の欠如、臆病が「生来性犯罪者」の諸特徴であり、これらの特徴をドストエフスキーがいかに正確に描いているかがチシによって列挙されてゆく。

次いで短編『正直な泥棒』（1848）で描かれているのは「機会性犯罪者（случайный преступник）」である。これは、生物学的要因だけでは犯罪者を説明できないことからロンブローゾが導入した概念であり、生物学的に犯罪者となるべき者ではないが、貧困や差し

---

[26] 初出は Достоевский как криминолог // Вестник права. 1901. январь.

[27] 犯罪者をめぐるロンブローゾの理論については、以下を参照。ピエール・ダルモン『医者と殺人者 ： ロンブローゾと生来性犯罪者伝説』鈴木秀治訳、新評論、1992 年 ; ルース・ハリス『殺人と狂気：世紀末の医学・法・社会』中谷陽二訳、みすず書房、1997 年 ; エランベルジェ〔エレンベルガー〕「犯罪学の過去と現在」『エランベルジェ著作集 3』中井久夫編訳、みすず書房、2000 年、266-287 頁。

迫った必要など環境や状況によって犯罪に至る者を指す。チシは、1848 年に、すなわち《死の家》にドストエフスキーが来る以前に書かれたものである点で短編『正直な泥棒』が特別な注目に値すると述べている。すなわち、この作品は、運命がドストエフスキーの注意を犯罪世界に向ける前に、このあまり理解されていない心理現象にすでに関心を持っていたことを示しているというのである。労働能力のないみじめな泥棒、「正直な泥棒」エメーリヤ・イリイチは、チシによれば、「犯罪者（преступник）」だが「まともな人間」である。彼は、ぎりぎりの必要に迫られなければ犯罪を行わない人物であり、知能犯罪者となることもない。また泥棒という評判を恐れ、良心の呵責に苦しめられるのも彼が生来性犯罪者ではない証拠である。機会性犯罪者は数が少なく、チシ自身の 30 年以上に渡る監獄での観察によれば、囚人のうちの 15-30%程度しかいない。そして、全員とはいえないまでも、大部分が平均的な正常な人間とは違い、エメーリヤ・イリイチのような弱くてみじめな人間である。

一方、ドストエフスキーの作品において、嫉妬や発作的な情熱に駆られて犯罪に至る犯罪者としてロンブローゾが挙げている「激情犯罪者（преступник по страсти）」にあてはまるのは、『白痴』（1868）のロゴージンと『永遠の夫』（1870）のトルソツキーである。トルストイは『クロイツェル・ソナタ』（1890）のポズドヌイシェフによって激情犯罪者を描こうとしたが、生来性犯罪者の特徴と混同してしまい、失敗したとチシは語る。彼によれば両者の違いはこうである。「激情犯罪者は犯罪者型人間と共通点は何もなく、どの点でも、ほとんどどの点でもまともな人間と違いはない。激情犯罪者が不幸なのは、主として、情熱的な天性を持っているからである。例外的な状況が彼から犯罪者を作りうる。しかし、彼はいつもまっとうな人間でしばしば好感のもてる人間なのである。」[28]

チシは、ロゴージンを犯罪的な欲望と善良で高潔な感情の板挟みになった人間とみる。「ドストエフスキーはロゴージンを力強い情熱的な人物として描き出している。この男は強く感じ、一つの感情に集中することができる。同時にあまり動機づけられていない突発的な激情の能力を持つ男である。粗野であるにもかかわらず、ロゴージンは善良で、高潔さを失っていない。」[29] 他方、トルソツキーはロゴージンとあまり似ていない。彼は弱々しい取るに足らない人間で、もう若くない立派な官吏であり、また全生涯刑法を破ったことのない尊敬すべき市民である。両者の共通点はただ情熱的な天性という点しかない。自分を裏切った妻を愛し、寡夫となったのちは 16 才の令嬢と結婚しようとし、最終的に管長の若くて美しい娘と再婚するという点からトルソツキーには「女好き」という情熱があることがわかる。しかし、この情熱は卑しいものであるせよ、必ずしも犯罪に直結するものではない。それゆえトルソツキーが病気のヴェリヤニノフを手厚く介抱した夜にかみそりで殺害を試みた行為は全く衝動的なものと判断されるのである。「女好きのトルソツキーにはあまり好感が持てないにしても、我々は彼に同情してやらなければならない。ただ例外的

---

[28] *Чиж*. Достоевский как криминолог // *Чиж*. Болезнь Н.В. Гоголя. С. 405.

[29] *Чиж*. Достоевский как криминолог. С. 401.

な状況だけが彼に殺人に手を染めさせ、彼は犯罪の前にも、その最中にも、犯罪後にも多く苦しんだのである。自分の苦しみで彼は自分の犯罪を全くあがなったのであり、ヴェリチャニノフが彼を警察の手に引き渡さなかったのは、ただ正しいというのみである。」[30]

最後にチシが「精神病型犯罪者（душевнобольной преступник）」として分類するのが『カラマーゾフの兄弟』（1879-80）のスメルジャコフと『罪と罰』（1866）のラスコーリニコフである。前者は犯罪者的な体質を持ち、後者は病理学的な体質を持つ。スメルジャコフは、金のために自分の父親を殺した冷血さ、犯罪の実行や隠蔽の巧みさ、無実を装う破廉恥さなどから、心理的に病人であると同時に生来性犯罪者であるとされる。精神病患者の父と白痴の母の息子であることから、両親から病理学的な体質を受け継いでいることも明白であり、そこからスメルジャコフが幼時から異常な行動をとっていたのも説明できる。

一方、ラスコーリニコフが精神病患者であるのも、チシによれば、自明のことである。ではある精神病患者が犯罪を行ったというだけの話に我々の知性や感情はなぜショックを受けるのか？　その答えとして、チシはラスコーリニコフを「道徳的感情を失っていない精神病患者、まともだが病んだ人間、それゆえ、自分の病の結果犯罪を決心したが、まともな人間として苦しむ人間」[31] とし、まともな人間が犯罪に手を染める際のあらゆる精神状態を尋常ならぬ正確さで描いている点にこの作品の重要な意味を見いだす。すなわち、犯罪を行ってもいかなる良心の呵責も感じない生来性犯罪者ではなく、犯罪に手を染めたものの動揺や恐怖に苛まされるまともな人間の極限的な心理状態を克明に描いた点に、チシは『罪と罰』の刑法学的観点からの価値を見いだすのである。理論に従って殺人を犯し犯罪がもたらす恐怖に苦しむという点ではラスコーリニコフは現代のテロリストと共通点を持つとされるが、『罪と罰』の意義はそのような一時的な現象にあるのではないとチシは言う。彼によれば、犯罪に対するまともな人間の永遠の嫌悪といった、人間一般に共通する普遍的な問題を扱っている点に意義があるのである。しかし、他方では、ラスコーリニコフはもはや完全な「まともな人間」ではない。というのも健康な人間ならば計画した犯罪がいかに理にかなったものと確信していてもその確信通りには行動しないのに対し、彼はテロリストや狂信者と同じく自分の行動に対する思想の力と戦うことができず、最終的には犯罪に手を染めてしまうからである。ラスコーリニコフは「生来性犯罪者」ではないにせよ、「高等退化者」であり「高潔な精神病患者」である。それゆえ、チシは、ラスコーリニコフは再生不可能であるというイタリアの犯罪学者フェリーの意見に同感を表明する。

「このような病人は《死の家》では再生できない。ドストエフスキーは、真実を伝える芸術家として、ラスコーリニコフの『段階的な再生』を描く決心がつかなかった。彼はそれが不可能であることを意識していた。だからそのような美しいテーマに誘惑されなかったのである。残念ながら、ラスコーリニコフのような病人には、犯罪者型人間がそうである

[30] *Чиж*. Достоевский как криминолог. С. 401.
[31] *Чиж*. Достоевский как криминолог. С. 412.

ように、再生も新生も不可能である。そのことをドストエフスキーは《死の家》の住人たちを観察することで確信していたのだ。」[32]

こうしてチシは、ロンブローゾの犯罪者類型論を逐一ドストエフスキーの小説の登場人物たちに適用し、犯罪者型人間と正常な人間との根本的な差異を作家がいかに正確に描いたかを強調する。しかし、このようなロンブローゾ的な犯罪者の分類と評価は必ずしも作家ドストエフスキーの意図するものではなかったにちがいない。「ドストエフスキーは、自身を異質者と感じていた。かれの『奇妙な人間』への関心と同情は一つになっている。それは『人間みな病人』という考え、『犯罪者も社会から絶縁すべきではない』という考えともつながっている。ドストエフスキーは『奇妙な人間』や病人を上から監視しているのではない。みんなと一緒にいたいという願いがおそろしいほどつよいのである」（中村健之介）と指摘されているように、[33] おそらくドストエフスキーにはそもそも「生来性犯罪者」という発想もなければ、犯罪者を正常な人間から逸脱した負の存在と考える思考法もなかったことだろう。その点ではチシの論考はドストエフスキー論としては著者自身の犯罪観に強く染まったかなり独断的なものである。だが、他方では、1900 年前後の時期、ロシアの精神医学が犯罪をどのように捉えていたかということに関しては多くを語る資料であり、そのような文化史的資料としては今日まだ読み返す価値があると思われる。

5. まとめ

チシは、ピョートル・コヴァレフスキーと並び、ロシアにおいて病跡学に手を染めた精神医学者の第 1 世代に属し、その論考には 19 世紀的な生物学的決定論の発想が支配的である。その点、チシと同じ世代の人物だがよりリベラルで新傾向をも柔軟に摂取したニコライ・バジェーノフや、ロシアにおける精神分析の紹介者として知られるニコライ・オシーポフなど後の世代の病跡学と比べると、かなり古めかしいものに見えなくもない。[34] 病跡学は同時代の精神医学を背景としている以上、その背景となっている理論が古びてしまうと、病跡学的研究そのものも学問的には信頼性を失うという宿命を負っている。しかし、今日の学問的成果からすると多くの誤謬を含み、ゆえに作家研究としても多くの不正確な判断を含んでいるとはいえ、歴史的な観点から見れば、チシの病跡学は今日なお見直すべきものも多い。

---

[32] *Чиж*. Достоевский как криминолог. С. 418.

[33] 中村健之介『永遠のドストエフスキー：病という才能』中央公論新社〈新書 1757〉、2004 年、37-38 頁。

[34] バジェーノフやオシーポフの病跡学については、См. *Сироткина И.Е*. Понятие «творческая болезнь» в работах Н.Н.Баженова // Вопросы психологии. 1997. № 4. С. 104-116; Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius*, pp. 57-116.

文芸批評という観点から画期的であると言えるのは、ここで、ベリンスキー以来ロシアの文芸批評において支配的な地位を占めてきた批評家（критик）という存在に対し、その地位に挑戦を挑むオールタナティヴな解釈者が登場したという点である。精神医学者チシは、批評家や伝記作家（биограф）たちによる美的あるいは社会的有用性の観点からの読みの一面性を批判し、精神医学という「科学」の観点からの読みの優越性をことあるごとに主張する。現実を正確に描き出すのが優れた芸術家とするならば（19 世紀後半ロシアでは優れた芸術家はそのようなものとして考えられていた)、優れた芸術家が精神病理学的な現象をも正確に描くことができるのも論理の必然的な帰結である。しかし、一般読者はもちろんのこと、批評家や伝記作家でさえ、このような観点から作家たちの功績を正しく評価することはできなかった。こうして優れた芸術家の作品の現代的な意味を理解し説明できる存在としてクローズアップされるのが、最新の学問的知見を身につけた精神医学者たちである。そしてこの精神医学の観点からの読みによって明らかにされる作品の真の意味は、必ずしも当の芸術家がその意味を自覚し理解しているとは限らないゆえ、解釈者としての精神医学者の立場は創作者としての作家と同等、時にはそれを凌駕するものとさえなる。なぜなら、精神医学者がいなければ作家はその偉大さが証明されえないからである。このような科学的観点からの読みを主張する病跡学は、伝統的な文芸批評とは一線を画する新しい文学の読みとして当時の読者公衆に新鮮な印象を与えたと思われる。

しかし、他方では、今日ポスト・コロニアル批評やジェンダー批評が明らかにしているように、このような「科学的な」言説は決してニュートラルなものではありえない。むしろ反対に、これらの言説はしばしば解釈者の思想・イデオロギーを強く内に秘めたものとなっているのである。そして、その際、科学的な客観性の標榜は、解釈者のニュートラルな立場を保証しているというよりは、むしろその主観的な思想やイデオロギーを覆い隠す隠れ蓑として働くことが多い。さらに強力な検閲制度によって本来政治論文などで論じられるべき問題が文学という形で論じられていたロシアでは、文学を論じることは、芸術の領域にとどまることではなく、常に著しく政治的・社会的な色彩を帯びていた。それゆえ、チシの「科学」を標榜するテクストの中にも、今日の読者は容易に彼個人の思想や政治的見解を見て取ることができるのである。そして、多くの場合、そのチシ自身の思想や政治的見解は論考の客観性を損ね、結果としてチシの病跡学は作家研究としては今日ほとんど通用しないものが多い。

だが、結局のところ、学問的あるいはイデオロギー的な観点からチシのテクストを断罪することはあまり生産的なこととは言えない。どれほど今日の学問の見地から見て不正確であっても、あるいは、どんなにイデオロギー的に問題を有するテクストであったとしても、チシのテクストが発表された当時には、多くの読者によってそれが「科学」の言説として受け取られ、その中に現れている精神医学の知識や発想が当時の人々の思考様式に浸透し定着したという現実こそが重要なのである。そうして浸透し定着した精神医学の知識や発想は、今度は現実の動きに敏感な「文学」というテクストにおいて独特の表現を取っ

てゆく。[35] そして、さらに文学のテクストという形を取った知識や発想は、時代の支配的な空気の反映として、逆に精神医学をも含む同時代の「科学」に影響を与えてゆく。[36] このような「文学」と「科学」の相互的な影響関係の中にこそ様々な発見の萌芽があるのであり、そのような発見の試みの第１歩としてチシのテクストを今日読む意味もあると言えるだろう。

[35] 例えば、ツルゲーネフの一連の「神秘小説」（当論考脚注 25 参照）。また 19 世紀後半に急速に広まったスピリチュアリズム（心霊主義）は当時の精神をめぐる科学の観点から説明されることも多く、フセヴォロド・ソロヴィヨフの長編『魔術師たち』（1888）や『偉大な薔薇十字団員』（1889）、アレクサンドル・アンフィテアートロフの長編『火の花』（1895, 1910, 1911）、ニコライ・ワグネルの短編『耐えきれず』（1895）など 19 世紀後半のスピリチュアリズムの影響の濃い文学作品には、しばしば精神医学的な知識や発想の反映を見いだすことができる。

[36] 例えば、シロトキナは、トルストイの著作がロシアの精神療法（psychotherapy）の誕生と形成に大きな影響を与えたことを指摘している（Sirotkina, *Diagnosing Literary Genius*, pp. 74-116）。